浮世めぐり

江戸からはじまる名所道中膝栗毛

目次

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・三
地図・・・・・・・・・・・・・・・・・・四～五
展覧会概要・・・・・・・・・・・・・・・六
江戸めぐり・・・・・・・・・・・・・・七～一二
諸国めぐり・・・・・・・・・・・・・・一三～二〇
東京めぐり・・・・・・・・・・・・・・二一～二六
奥付・・・・・・・・・・・・・・・・・二七

～凡例～

キャプションの記載事項は左記の通り。

キャッチコピー
№
題名　：作品名
絵師　：原案を描いた人
版元　：出版人のこと
刊行年：和暦（西暦）
彫師　：彫った人
摺師　：摺った人

・掲載作品の順序は、展覧会の展示順とする。

・作品の題名、解説中の引用文などは、旧字を適宜新字に変更している。

・作品中に該当箇所のない事項については省略している。

ごあいさつ

本日は、私たちが企画しました展覧会「浮世めぐり　江戸からはじまる名所道中膝栗毛」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

本展覧会は、中央大学教育力向上推進事業「浮世絵展示を活用したアクティブラーニング」（二〇一六～二〇一八年度）の助成によるものです。昨年度に引き続き、第二回目の開催となります。本事業の展開にあたっては、学生が浮世絵を自分の手で展示することで、日本文化の神髄を学ぶとともに、その素晴らしさを広く世間に発信していくことを重視しました。この展覧会に向けて、文学部提供課外プログラム「実践的浮世絵学」を開講し、学部一年生から大学院修士一年生まで十三名の学生が週一回の授業を通じて、浮世絵の学習と展示に向けての準備作業をおこなってきました。その内容は、浮世絵の考証、展覧会のテーマの決定、浮世絵のキャプションの作成、チラシやパンフレットの作成、学内外への広報、浮世絵の額装、展示会場の設営、展覧会の運営など、活動は多岐に及びました。

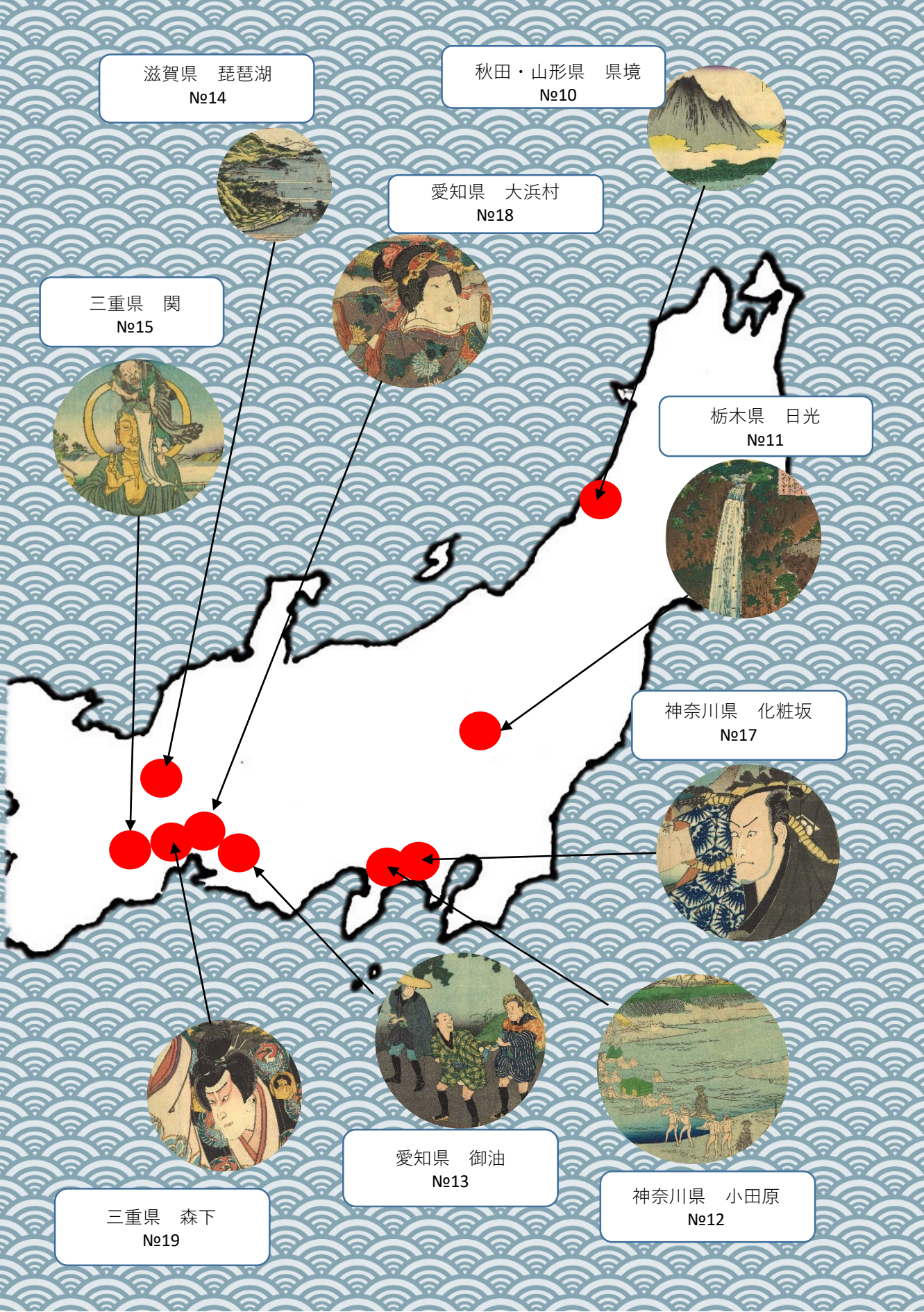
本展覧会では、学生たちが江戸・東京、日本諸国のさまざまな名所について、それぞれの視点から紹介しています。ご覧になった後には、旅気分にひたることのできる撮影スポットも用意してあります。浮世絵の鑑賞とともに、そうした趣向もお楽しみ下さい。

会場に展示いたしました浮世絵は、平木浮世絵美術館からお借りしたものです。本展覧会に対するご理解とご協力を賜りました佐藤光信館長、並びに、浮世絵展示全般にわたって懇切丁寧にご指導いただきました森山悦乃学芸員と松村真佐子学芸員には、心より感謝申し上げます。平木浮世絵美術館との橋渡しは、江戸の書籍や出版流通の研究を長らく続けてこられた本学文学部国文学専攻の鈴木俊幸教授に、その労を執っていただきました。鈴木先生にも、心より感謝申し上げます。

それでは、ご来場の皆様、展覧会会場に並んだ浮世絵をご覧になりながら、江戸から東京までの時空を超えた旅を心ゆくまでお楽しみください。

二〇一八年　一月

中央大学文学部教授　都筑　学


滋賀県　琵琶湖
№14
秋田・山形県　県境
№10
愛知県　大浜村
№18
三重県　関
№15
栃木県　日光
№11
神奈川県　化粧坂
№17
愛知県　御油
№13
神奈川県　小田原
№12
三重県　森下
№19

王子
№7
日本橋
№1
吉原
№5
浅草
№2、6
新橋
№24
江戸城
黒枠:東京23区
赤枠内:江戸
両国
№3 、4、21、22
溜池山王
№9
品川
№23
高輪
№20
芝
№8
山口県　錦帯橋
№16
赤丸は諸国の名所、
青丸は東京・江戸の名所の場所を示す

浮世絵

という美術品が存在するということは知っているけれど、

具体的にどんなものかは**わからない**……。

そんなところからスタートした学部も学年も異なる本学の学生が、浮世絵のプロフェッショナルから指導を受けながら作り上げた展覧会がこの『浮世めぐり～江戸からはじまる名所道中膝栗毛～』です。

会期決めからテーマ設定、作品選びにタイトル決め、作品解説や会場づくりを戸惑いながらも、お互いにアイディアを出し合いながらほぼ一から作りあげました。

本展で展示するのは江戸・諸国・東京の名所が描かれた二十一点の浮世絵です。浮世絵と初めて向き合った学生たちが、風景画の見どころをご紹介致します。

小規模な展覧会ではありますが作者によって見方の違う美しい景色を、旅に出た気分でゆったりとお楽しみください。

実践的浮世絵学受講者一同

第一章　江戸めぐり

意気で鯔背な松魚売り
（いきで　いなせな　かつおうり）

1

東海道五十三次の内日本橋　松魚売

絵師　歌川豊国（三代）
版元　辻岡屋文助
刊行年　嘉永5年閏2月（1852）
彫師　彫竹
摺師　摺大久

「カツオだ、カツオだあ。初カツオだあ。買った、買った。さあ買った。近くに寄って見るがいい。そんじょそこらのカツオとは、訳が違う。活きが違う。一本釣りの荒くれ漁師が、海に漕ぎ出し、朝一番に取ってきた。正真正銘生きのいい初カツオだ。これを買わなきゃ、江戸っ子がすたる。どうだ、どうだ。買わないか。」

こんな威勢のいい口上が、聞こえてきそうな浮世絵。

「目に青葉 山ほととぎす 初鰹」（山口素堂　1642～1716）。夏が来ると、江戸っ子は松魚(かつお)の夢を見て、心を踊らせた。江戸っ子は、大枚をはたいても初鰹を買ったそうである。このカツオ売り。気っ風がよくて男前。それに加えて、筋肉隆々。三代目板東三津五郎。日本橋での一コマ。（都筑）

江戸時代の旅について

江戸の庶民にとって旅とは主に信仰を名目に行われるものであった。しかし、この様な建前とは裏腹に本音としては娯楽を楽しむという文化があった。民俗学者である神崎宣武氏が著書『江戸の旅文化』で述べている様に日本の巡礼とは、寺社に遊里などをつないでの「周遊観光」といえる。当時の庶民たちは講という組織を作り、互いに費用を出し合い代表者数人が代参をするということが多かった。そのため旅行者の数は我々が思うほど少なくない。また女性の旅も行われていた。「入り鉄砲に出女」という言葉がある通り、女性が関所を通る際には入念に調べられるが実際には関所抜けがごく普通に行われていた。また費用に関しても自らで貯め、家事全般を嫁に任せられる様になる四十、五十での旅が多かったようである。こうして見ると江戸の庶民達にとっての旅の感覚は、現代人である我々と似ているところがある。この展覧会を機に少しでも江戸の旅の感覚を分かっていただきたい。（栗原）

福よ来い来い酉の市

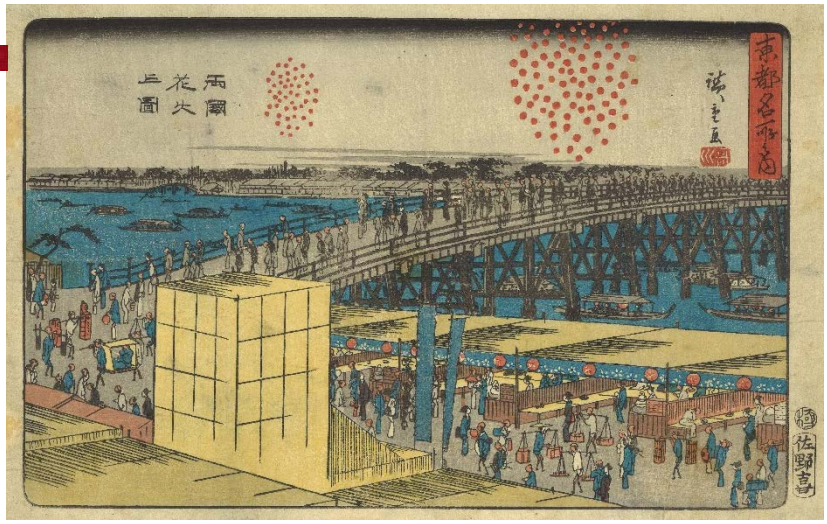
2

江戸自慢三十六興　酉の丁　銘物くまで

絵師　歌川広重（二代）/歌川豊国（三代）
版元　平野屋新蔵
刊行年　元治元年7月（1864）
彫師　彫多七

酉の市（酉の祭）とは、例年11月の酉の日に行われる祭のこと。鷲神社（おおとりじんじゃ）の酉の市は18世紀半ばには相当な賑わいを見せていたことが知られ、現在でも執り行われている。この祭りで人々は鷲神社の神々に感謝し、来る年の幸運を祈った。酉の市では熊手が縁起物とされ、購入した翌年の同祭で買い替える風習がある。熊手を一年間飾り、福を取り込んでくれたことに感謝し、次の年の酉の市で納めるのだ。本作の後ろ側に見える人々の行列は、これから熊手を納めに行く人たちであろう。手前の三人は、酉の市で縁起物とされる「八頭」と呼ばれる芋や、「切山椒（きりざんしょう）」という餅菓子を持っていることから、すでに新しい熊手を買い替えた人々であると考えられる。作品全体から、福を願う人々のにぎやかな声が聞こえてくるようだ。（平田）

江戸の空には大輪の花



3

東都名所之内
両国花火之図

絵師　歌川広重（初代）
版元　佐野屋喜兵衛
刊行年　天保後期

両国川開きとは、火事の多かった江戸の火除け地として造られた両国橋たもとの広小路や大川端に、旧暦の5月26 日から8月28日の間、夜店や屋台の出店が許された納涼期間の初日。江戸の夏の始まりを告げる風物詩だった。町人の財力が増した時期でもあったので、大店の旦那衆が花火のスポンサーになったことから川開きの日のみならず夜ごとに絢爛豪華な花火があがったそう。大川のあたりに下屋敷をもつ大名たちも、町人に負けじと競って花火を打ち上げたとか。橋のたもとには歌舞伎や軽業などを見物できる見世物小屋や水茶屋（みずちゃや）も描かれていて、両国橋界隈の活気を垣間見ることができる。（金子）

花より団子

4
江戸高名会亭尽　両国
絵師　歌川広重（初代）
版元　藤岡屋彦太郎
刊行年　天保9～11年
（1838-1840）

東両国の駒留橋にある料理茶屋『青柳』を描いた作品。『江戸高名会亭尽』は30枚揃いの作品で、その全てが江戸の有名料理茶屋を題材としている。この船はこれから納涼花火に向かうところであり、茶屋の娘たちが料理を運び込んでいる様子がなんともチャーミングだ。また、各図には必ず狂句が記されているのも特徴的である。『青柳は妙月雪と花火の夜』（峯岸）

吉原三大景物の一つ、
男装の麗人が舞う俄
（にわか）祭り！

5
江戸名所　新吉原俄之図
絵師　歌川広重（初代）
版元　有田屋清右衛門
刊行年　天保後期

新吉原は現在地の台東区千束（せんぞく）四丁目にあった幕府公認の遊郭。明暦（めいれき）の大火の後に日本橋葺屋（ふきや）町（ちょう）から移転したため、“新”吉原と呼ばれていた。描かれているのは八月朔（さく）日（じつ）から九郎助稲荷（くろすけいなり）の祭礼と兼ねて行われる俄（にわか）という行事の様子。俄とは俄狂言の略で、素人の即興寸劇のことである。絵には山車（だし）で囃子（はやし）を演奏する廓の若い衆の姿や、揃いの着物を着て獅子舞を披露する女芸者の姿が見られる。江戸町二丁目の暗く奥行きのある様子が画面手前の俄の明るさ賑やかさを引き立たせる、夜の遊郭ならではの構図である。（榎本）

納めの観音、歳の市

6

東都名所
浅草金竜山年之市群集

絵師　歌川広重（初代）
版元　佐野屋喜兵衛
刊行年 天保2年（1831）頃

浅草歳の市の様子を捉えた1枚。歳の市とは、年の暮れに新年の飾り物や日用品を売る市のことである。雑踏をよく見てみると、桶や提灯を抱えている人物などが見受けられ、新年を迎えるまでの多忙な庶民の日常がありありと伝わってくる。本作は高所から見下ろす俯瞰の構図を採用しており、現在と変わらない浅草寺周辺と人々の賑わいを見事に描き出している。（中川）

さあ、どいた、どいたぁ！
狐の行列のお通りだよ！

7

江戸名所道戯尽
（どうけづくし）十六　王子狐火

絵師　歌川広景
版元　辻岡屋文助
刊行年　安政6年6月（1859）

歌川広景の代表作、『江戸名所道戯尽』は江戸の名所で様々な人を面白可笑しく描いたシリーズもの。この作品は現在の東京都北区の王子稲荷神社の辺りを描いている。狐たちが南瓜を挟み箱に、トウモロコシを毛槍に見立てて大名行列ごっこをしているところである。狐たちに運ばれている男性はお殿様のつもりなのだろうか？狐に化かされてしまっているようだ。実は王子稲荷は狐火の名所で、大晦日になると神の使いである狐たちが王子稲荷に初詣に行くらしい……。（庄山）

活気溢れる浮世絵のメッカ

8

東都名所　芝神明宮
御宮元暁神楽之図

絵師　歌川広重（初代）
版元　佐野屋喜兵衛
刊行年　弘化4年～嘉永5年
（1847-52）

描かれているのは江戸有数の繁華街だった芝地域の芝神明宮である。古くは飯倉神明宮や日比谷神明宮とも称され、芝神明というのは俗称であった。伊勢神宮の内宮外宮の祭神を祀っていることから関東のお伊勢さまとして信仰を集めてきた。9月11日から続く「だらだら祭り」と呼ばれる祭礼があるが、「元暁神楽（がんぎょうかぐら）」とは元日の明け方に舞う神楽のこと。背後に見える鈴は、参道を進んだ先にある社殿の手前でくぐるものである。平時の芝神明前には様々な店が並び、浮世絵商売とも深く結びついていたという。この絵の出版元である佐野屋喜兵衛も店を構えていた。（小野寺）

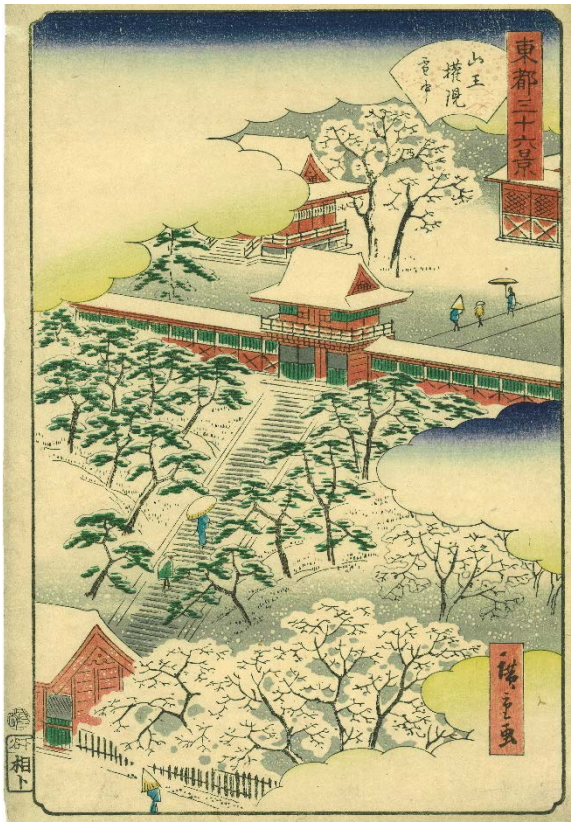
徳川の鎮守、白雪の山王権現

9

東都三十六景 山王権現雪中

絵師　歌川広重(二代)
版元　相ト
刊行年　文久2年3月（1862）

日吉山王権現は江戸第一の大社であり、江戸三大祭である山王祭が行われ、徳川の産土神（うぶすながみ）（その人の生まれた土地を守る神）とされた。明治の廃仏毀釈によって、現在は千代田区に日枝神社として残っている。この絵は特に山王男坂を描いたもの。山王男坂は神社の東側にあり、東京メトロ溜池山王・国会議事堂前駅側からのメインの参拝ルートである。特徴的な社殿の赤が、雪の白に映えて美しさを増す一枚である。（金子）



第二章　　諸国めぐり

出羽の富士山　鳥海山

10

諸国六十八景　出羽　鳥海山

絵師　歌川広重（二代）

刊行年　文久2年2月（1862）

この絵は、二代歌川広重が描いた「諸国六十八景」「出羽（でわ）　鳥海山（ちょうかいさん）」である。鳥海山は、山頂に雪が積もった姿が富士山にそっくりなことから「出羽富士」とも呼ばれる活火山であり、江戸時代にも数回噴火をしている。出羽国は現在の山形県と秋田県に位置した旧国名。この両県に跨るように標高2．236メートルの東北地方では最も高い山。絵の中では高さが誇張されて描かれてはいるものの、手前の大波と合わせ大迫力である。ぜひ近くまで来て大自然を感じてみては。（戸出）

ド迫力！雄大な自然を堪能

11

日光山華厳滝之図

絵師　安達吟光

版元　邨上喜市　小林次郎

刊行年　明治15年6月20日（1882）

栃木県の最も有名な観光地の一つと言える華厳の滝を表した作品。高さは97メートルあるとされている。滝つぼに向かって水流の色合いが変化している濃淡の様子から、豪快な水の流れを感じることができる。また水流のあたりで羽ばたく鳥の群れや、岸辺で観光する人々が柵のそばで滝を見上げる様子が、滝の規模の壮大さをより強調している。（中村）

12
東海道　小田原
絵師　歌川広重（二代）
刊行年　慶応3年12月（1867）

小田原宿の少し手前、酒匂（さかわ）川の渡しを描いたもの。東海道を上る旅人は酒匂川を越え、小田原宿を通り、険しい箱根の山に挑む。川越えには肩車や複数名で担ぐ蓮台（れんだい）等の手段があり、川の水位やどの手段を選ぶかによって渡し賃は異なっていた。絵では武士を乗せた蓮台が今まさに川に入ろうとしているところで、河原にいるもう一人の武士の側では何やら三人の人足が揉めている。その三人をよく見てみると特にお腹のあたりに愛嬌を感じる。空と川の濃い青が全体を引き締め、鮮やかな夏山の緑が美しい。涼しげな河原の風景を描いた作品である。（榎本）

旅の宿

駅に置かれる江戸時代の宿場には本陣、脇本陣、旅籠屋（はたごや）、木賃宿（きちんやど）などがあった。

本陣は参勤交代の大名や公家、幕吏などが泊まる大旅館で、その土地の名家が役割を負っていた。貴人が泊まらない場合は、庶民も利用することができた。脇本陣は本陣の補助的な役割の宿で、本陣に次ぐ名家が担った。

江戸時代はじめに一般的だったのは木賃宿である。木賃とは薪代のことで、旅人が食料を持ち込んで自炊する。次第に宿で食事を提供する旅籠形式が多くなるが、安宿として需要を満たし残り続けた。

旅籠は武士や庶民を迎えた食事つき二階建ての旅宿である。平旅籠と表向き「飯盛女」と呼ばれる遊女接待のある飯盛旅籠が存在した。飯盛旅籠は繁盛したが、その強引な商売や風紀の乱れを望まない旅人もいた。

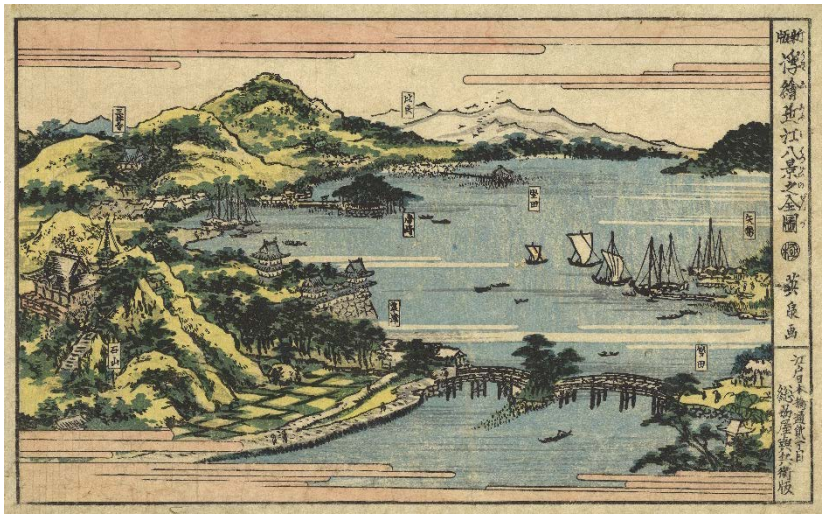
そこでできたのが浪花講と呼ばれる組合であった。組合員の旅人は講が発行する道中記に従って指定された優良旅館に泊まることができた。今の旅行会社のはしりである。（小野寺）

弥次さん、
俺は狐じゃないってば！！

13
東海道五十三次　御油
絵師　歌川広景（上）歌川国芳（下）
版元　辻岡屋文助
刊行年　万永元年6月（1860）

上の風景画は歌川広景による作品で、御油宿（ごゆしゅく）（愛知県豊川市）と隣の赤坂宿までにある御油の松並木を描いている。下の絵の右の二人組は、「東海道中膝栗毛」の弥次郎兵衛（やじろべえ）と喜多八（きたはち）である。松並木では狐が旅人に化けるという噂を聞いた弥次郎兵衛。先に松並木へ向かっていた喜多八を化けた狐だと思い込む。弥次郎兵衛は「正体を現せ」と喜多八の手を後ろに回し、手拭いで縛り上げようとしている。そんな弥次さん喜多さんをキセル片手に笑いながら見る旅人。風景画と旅の情景を合わせて楽しめる欲張りな一枚である。（渡辺）

琵琶湖の名所を一望！



14
新版浮絵近江八景之全図
絵師　渓斎英泉
版元　総州屋与兵衛
刊行年　文政初期

「新版浮絵近江八景之全図」では「浮絵」と呼ばれる表現方法で、近江国（滋賀県）の名所8か所を1枚の絵に収めて描いたもの。近江八景とは近江国にみられる優れた風景から「八景」の様式に則って8つを選んだ風景題目のひとつ。琵琶湖の南部にある名所、石山秋月・勢多夕照・粟津晴嵐・矢橋帰帆・三井晩鐘・唐崎夜雨・堅田落雁・比良暮雪の8箇所である。浮絵とは浮世絵の様式のひとつ。西洋の遠近透視画法を用いて、遠近感を強調して描いたもので、実景が立体的に浮き出て、奥行きが深まって見えるようになっている。（戸出）

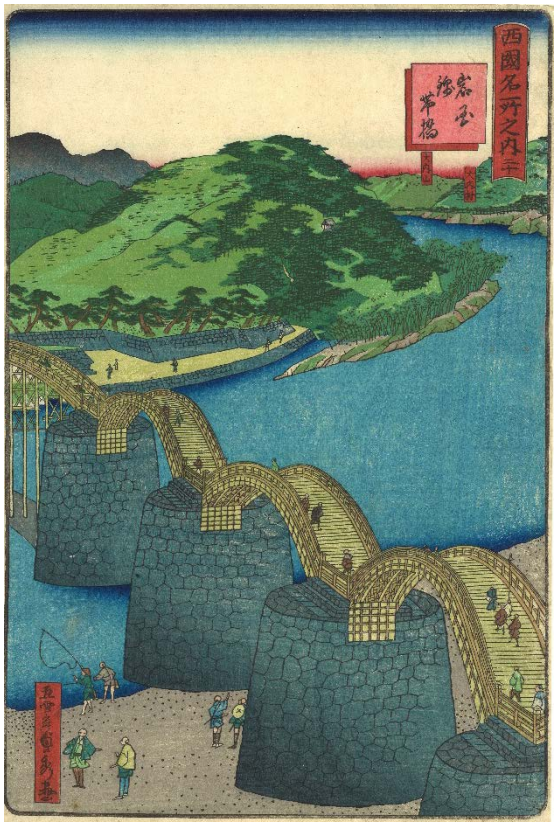
摩訶不思議、
一休さんの開眼供養！

15

狂画五十三駅之一枚　関
一休禅師　地蔵尊　かいげんのづ

絵師　河鍋暁斎
版元　（大黒屋金之助　金次郎）
刊行年　（慶応2年6月（1866年））

関町には三関のひとつである鈴鹿関があり、行き交う人を見守る関のお地蔵さまが置かれていた。そのお地蔵さまの開眼供養（かいげんくよう）を、たまたま通りかかった京の都で名高い一休和尚が「釈迦はすぎ弥勒はいまだ出でぬ間の　かかるうき世に目あかしめ地蔵」というなんともおかしな経で行ったことが発端の不思議なお話が伝わっている。作中はためいている白い布はなんと一休和尚の下帯。ユーモアに溢れた楽しい画題を独創的な筆遣い、繊細な書き込みで大胆な構図を描き出している、河鍋暁斎らしい1枚。（金子）



洪水に負けるな錦帯橋！
情熱と技術の極み。

16

西国名所之内口二十　岩国錦帯橋
大内村　大内山

絵師　歌川貞秀
版元　（山口屋藤兵衛）
刊行年　（慶応元年7月（1865年））

錦帯橋（きんたいきょう）は延宝元年（1673）に建造された五連のアーチ橋。それまで度重なる洪水によって、錦川に架けられた橋は何度も流されていた。岩国藩主吉川広嘉は、橋脚を用いない橋ならば洪水にも耐えられるとのアイディアを立てる。その実現に着手し、ようやく完成したが、その翌年の洪水でまたまた橋は流出。すぐに橋台を補強して再建したのだった。その後、約250年間、昭和期まで錦帯橋は洪水に耐えた。異形を放つ五連の架け橋は日本三大奇橋に数えられている。アイディアを形にする。情熱と技術の賜物だといえよう。（都筑）

鬼王～曽我兄弟に忠誠を尽くした男～

17

東海道　平塚　大磯間　化粧坂　鬼王

絵師　歌川豊国（三代）

版元　清水屋直次郎

刊行年　嘉永5年12月（1852）

彫師　彫多吉

三代歌川豊国の「役者見立東海道五十三駅」の中の一枚である。作品の題の化粧坂（けわいざか）は、平塚宿（神奈川県平塚市）から隣の宿場、大磯（神奈川県大磯町）に向かう道中にある。描かれている鬼王とは、「曽我物語」の曽我兄弟の家来のことである。「曽我物語」は十郎、五郎の曽我兄弟が父の敵討ちをする物語で、江戸時代には歌舞伎となって人気を博した。兄弟の恋人である大磯の虎（おおいそのとら）と少将（けわいざかのしょうしょう）、そして家来の鬼王は兄弟の死後、彼らを弔い、敵を捕らえるために奔走した。（渡辺）

ちょっぴり千鳥はおてんばさん？

18

東海道　岡崎　池鯉鮒間　大浜村　千鳥

絵師　歌川豊国（三代）

版元　上総屋岩蔵

刊行年　嘉永5年10月（1852）

上記と同様、三代豊国「役者見立東海道五十三駅」の一枚で、現在の愛知県にあたる岡崎・知立間での役者絵である。岡崎は徳川家康ゆかりの地であり西三河地方の経済・文化・交通の中心都市として栄え、知立は当時「池鯉鮒」と表記され東海道39番目の宿場で馬市として有名であった。千鳥の着物に「観世水（かんぜみず）」と呼ばれる渦を巻く水の模様が見られることから、この役者は二代目沢村田之助と考えられる。さらに着物には役名にちなんだ千鳥があしらわれている。颯爽と袖を捲り上げ、今にも動き出しそうである。（中村・六本木）

打ち下ろす鉄扇の先には…？

19

東海道五十三次之内　庄野　亀山間
森下　堀の蘭丸

絵師　歌川豊国（三代）
版元　小林泰治郎
刊行年　嘉永5年10月（1852）
彫師　彫千之助

宿と宿の間にある村を「間の村」という。森下は東海道五十三次のうち伊勢（三重県）の庄野宿-亀山宿間の中富田村にある。間の村には旅を便利にし疲れを癒す様々な施設が備わっていた。幕府から戦国時代の人物の表記に制限がかけられていたため名前に自主規制がかけられているが、主題の人物は戦国時代、織田信長に仕えた森蘭丸である。肩衣に描かれた「鶴丸紋」がそれを象徴している。先端を持ちあげたような前髪は歌舞伎で強い若者を表す「掴立（つかみだて）」。そんな彼の舞台での見せ場は饗応役の武智（明智）光秀を鉄扇で打つ「眉間割」の一幕。迫力の一枚である。（小野寺）

浮世絵ができるまで

浮世絵は複数の職人によって手掛けられる総合的な芸術作品である。絵師、彫師、摺師、そして彼らを取りまとめる出版社である版元という分業体制で浮世絵は出来上がるのだ。

まず、絵師が版画の原案である版下絵（はんしたえ）を墨でかく。次に、その版下絵をもとに彫師が主版（おもはん）という白黒の版を彫り上げる。そして絵師に色を指定してもらい、使う色の数だけ色版（いろはん）を彫る。ちなみに、彫師の技法、毛割（けわり）は髪一本一本まで繊細に彫るもので、師匠クラスの職人にしかできない技であった。そして最後に摺師が全体のバランスを計算しながら、版木や絵の具を調整し、主版、色版の順に摺り上げていく。グラデーションを表現するぼかし摺、光沢を出す正面摺など、数々の技法を駆使しながら作品に奥深さを与えていくのだ。絵師のイメージを具現化するためには、彫師、摺師の高い技術が必要不可欠であり、その細やかな技が、浮世絵の繊細な美しさをうむのであろう。（渡辺）

風景画について

江戸後期に入ると、美人画や役者絵といった伝統的な浮世絵の主題に新たな画題が登場した。その代表が風景画である。交通網の整備や経済的な発達を背景に庶民の間で旅や観光地への憧憬が高まってゆくと、各地で名所図が刊行されるようになった。こうした名所図は観光地の風景を手に取って眺めることができたため、いわゆるリーフレットのような実用性を兼ねていた。

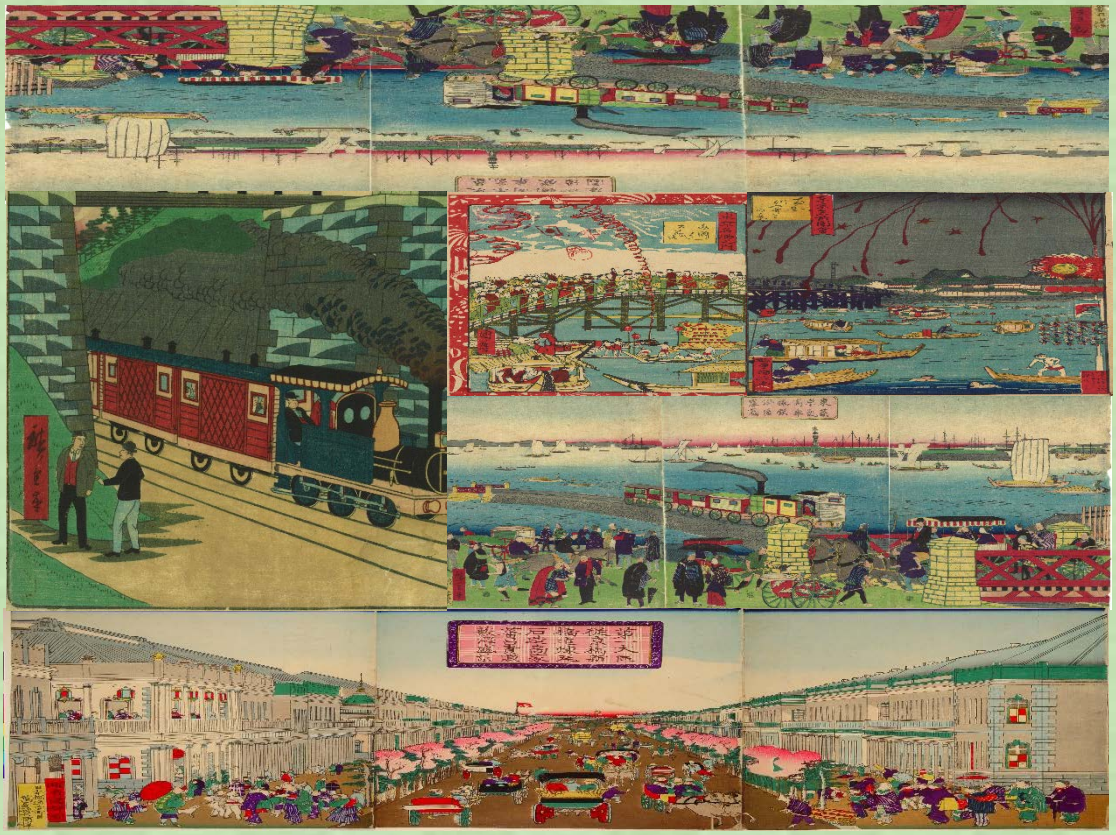
浮世絵のジャンルとしての風景画の地位を確固たるものとしたのが、天保2年(1831年)に刊行された葛飾北斎の[富嶽三十六景]である。それ以前に浮世絵の中に風景が描かれることはあったものの、その多くが背景に過ぎなかった。風景自体が画題となるには遠近法やぼかしの技法など、空間の巧みな表現の獲得が必要であった。北斎はこうした技法を積極的に取り入れた結果、[富嶽三十六景]は人気を博し商業的に大成功を収めた。この後、歌川広重による[東海道五十三次]の制作や、風景画に優れる歌川国芳の登場により風景画は一躍浮世絵の主要なジャンルとなった。(中川)

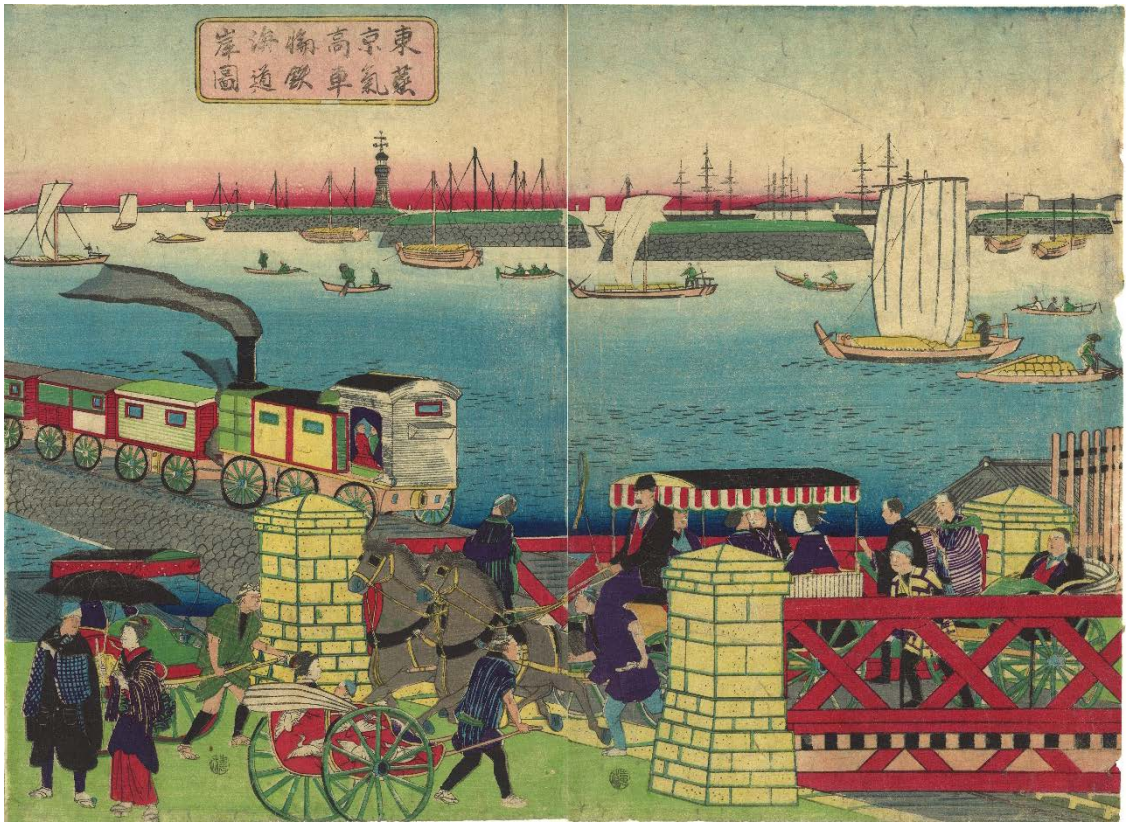
東海道中など有名な旅路

東海道、日光街道、奥州街道、中山道、甲州街道のいわゆる五街道が整備され、太平の世となった江戸時代。庶民の間で旅ブームが起こった。中でも伊勢神宮は特に人気があり、行きは東海道を通って伊勢参詣をし、帰りは中山道を通って善光寺参りをするのが一般的だった。このコラムでは東海道と中山道の旅路について紹介したい。

東海道・中山道は江戸日本橋を起点に京都三条大橋に至る道である。中山道は中仙道と書かれる時もあり、庶民には木曽路の呼称で親しまれていたようだ。東海道には天下の険で有名な箱根八里や大井川の川越え、中山道には和田峠(わだとうげ)や木曽のかけはしなどそれぞれの道中で様々な難所が存在する。これだけだとただキツイ旅路と思われるかもしれないが、宿場やその道中にグルメや名産品もあり、『東海道中膝栗毛』や当時の旅行案内を見ても中々楽しそうな旅路である。本展覧会でも東海道、中山道の名所を描いた作品がある。ぜひ探してみてほしい。(榎本)

第三章　東京めぐり





明治は進むよどこまでも

20

東京高輪海岸蒸気車鉄道図

絵師　歌川広重（三代）

版元　綱島亀吉

刊行年　明治4年10月（1871）

題名にある高輪という地名は現在の東京都港区にあたる。1872年に新橋―横浜間で日本初の鉄道が開通しているためこの浮世絵は、高輪(現在の品川駅)での試運転を描いたものと思われる。絵の中には試運転を見物に来ている人の姿が見受けられることから当時の人々の間でも注目される出来事であったことが分かる。新しいものへの興味関心は、明治の人も現代人である我々も、はたまた歌川広重であっても変わらない様である。（栗原）

文明開化と鉄道

明治新政府の指導のもと、日本が西洋の国々に追いつこうとさまざまな西洋文明が積極的に取り入れられた。この影響で急速に人々の生活も西洋化していった。これらの動きを「文明開化」という。

文明開化によって街の様子も一変した。人々は洋服を着るようになり、西洋から輸入された食べ物を食べるようになった。街には赤レンガの洋館が建ち並び、ガス灯が灯り、人力車が走った。明治5年（1872）には、新橋―横浜間に日本初の鉄道が開通し蒸気機関車が運行を開始。海上を航行する蒸気船に対し、陸上を走ることから、蒸気機関車は人々から「陸蒸気（おかじょうき）」と呼ばれ親しまれた。文明開化でにぎわう街に、鉄道の開通は人々にさらなる新しい風を吹き込んだことだろう。（平田）

わぁ！なにが空から降ってくる？

21

東京名勝之内　両国はし大花火

絵師　国麿

今も「隅田川花火大会」に名を変えて続いている、両国橋の川開き。江戸東京の人々に深く愛されているこの催しは多く錦絵の題材に選ばれてきた。中でもこの一枚は珍しい昼の花火の様子を描いたもの。夕刻に打ち上げるとはいえ、明るい空でも映えるようにパラシュートがついて煙を出しながら落下する「吊物」や、万国旗などもつけられた「細工小物」、「旗物」が描き込まれているのが特徴である。そういった花火の様子が、絵の外枠にも図案化して描かれている。見ているだけで楽しくなるような作品である。（金子）

同じ空を見ている？！

22

東京名所図会　両国川開きの景

絵師　歌川国政（四代）

版元　牧テウ

刊行年　明治21年5月30日（1888）

夏の花火の代名詞と言えば、「隅田川花火大会」。実はその名前で呼ばれるようになったのは昭和53年（1978）からで、それ以前は「両国の川開き」と呼ばれていた。享保の大飢饉で出た多くの犠牲者の慰霊のために水神祭を行い、両国橋の周辺で花火を打ち上げたことから享保18年（1733）に始まったとされ、以来、300年近く歴史が続いている。両国の空に開いた大輪の花を画題にした錦絵は数多くの絵師に描かれているが、この作品の絵師、四代目歌川国政は文明開化絵や役者絵、似顔絵を得意としただけあって、生き生きした人々の表情が印象的な一枚である。（金子）

23

東京名勝図会　品川八ツ山下鉄道

絵師　歌川広重（三代）
版元　小林鉄次（治）郎
刊行年　明治6年1月（1873）

東海道は江戸と京都を結ぶ重要な街道である。慶長6年（1601）にその初駅に指定された品川宿は、中世以降に栄えた。八ツ山とはこの品川宿のはずれに位置する丘のことである。

本作には、鉄道が八ツ山の麓を通り抜けて行く様子を、橋の上からもの珍しそうに眺めている人々の姿が描かれている。文明開化の象徴ともいえるこの鉄道は、本作が描かれる前年の明治5年（1872）に、新橋―横浜間に開通したばかりのものだ。鉄道を見守る人々は、文明開化の波に乗って洋服を着ていたり、ハット帽を被っていたり、乗馬していたりと様々である。鉄道に興味津々の彼らからは、新しい時代への期待に満ちた感嘆の声が聞こえてくるようだ。（平田）

検印について

浮世絵版画の刻された印のなかに刊行の際に検閲を受けた証である検印（改印）がある。これは、天明7年（1787）、老中松平定信が寛政の改革（1787-93）の一環として、流行物・幕府批評・贅沢品・風俗規制などの版行の規制に該当することが多かった浮世絵が検閲されたことにはじまる。寛政2年（1790）から、明治8年（1875）に明治政府より新出版条例が発布され、出版物に発行年月日が明記されるようになるまで続けられた。検閲の際の手続きとしては、版元が版下の段階で行事（又は名主）に提出し、行事・名主が差し支えなしと判断すれば、その版下に改印を捺して返す、版元は改印をそのまま刻させて摺出するというのが通例であった。種類としては、「極」の字の印や検印した年月が記された「年月印」、検閲した行事や名主の名が記された印など、時代によって変遷していった。そのため、検印を見るだけで、おおよその発行年月や検印主まで特定することができる。
（戸出）

京橋から新橋まで、元祖銀ブラ

24

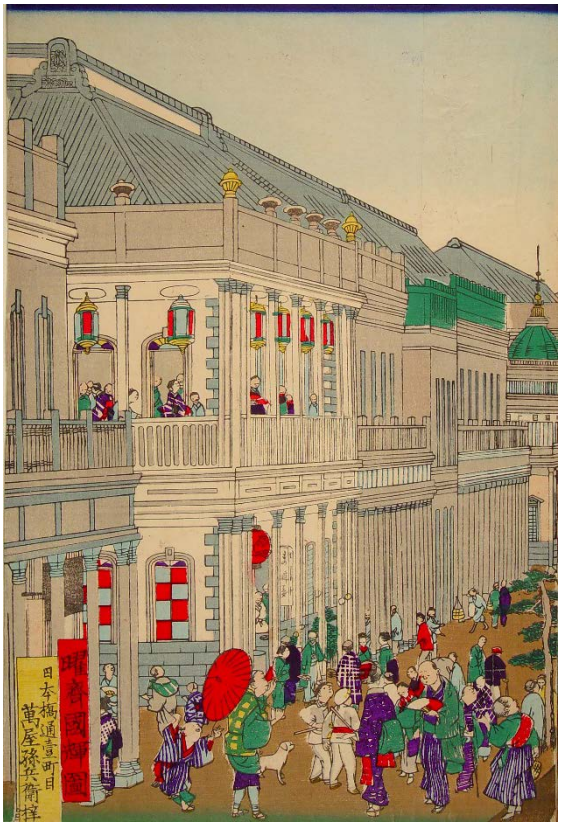
第一大区従京橋新橋迄煉瓦石造商家蕃昌貴賤藪沢盛景

絵師　曜斎国輝（二代）

版元　万屋孫兵衛

日本初の鉄道路線は、新橋駅ー横浜駅（現在の桜木町駅）間に開業。明治5年（1872）9月12日のことであった。鉄道唱歌にも、「汽笛一声新橋を」と歌われている。

新橋から横浜とは反対方向の、京橋までの街並みを描いたのが、この浮世絵。通りは、人力車や馬車、連れ添って歩く人たちで大賑わいである。人々の出で立ちを見ると、洋服あり、着物ありと、さまざま。ちょんまげを結っている男性もいたりする。江戸から明治へと時代は変わったものの、人々の意識はまだまだそれに追いつかない。そんな様子も見て取れる。桜並木が続く通りには、ずらりと洋館が建ち並ぶ。麗らかな春の一日。どっと新橋へと繰り出して、元祖「銀ブラ」を思う存分味わったに違いない。（都筑）



2017年度　中央大学教育力向上推進事業
実践的浮世絵学
浮世めぐり　江戸からはじまる名所道中膝栗毛

会　　期：2018年1月30日（火）～2月4日（日）
会　　場：中央大学　文学部棟3105教室
主　　催：中央大学文学部
協　　力：公益財団法人平木浮世絵財団
担当教授：都筑　学
受講生　：榎本　芙巳
小野寺　貴之
金子　瑞葵
栗原　隼人
小沼　泰輔
佐々木　結衣
庄山　詩織
戸出　晴香
中川　萌依
中村　香織
畑中　麻那
平田　果穂
峯岸　晃希
六本木　いつき
渡辺　美枝